

# アメリカ詩の研究

長 畑 明 利

メディアで報道されているように、日本における人文・社会系分野の研究教育は前途多難の様相を呈しており、その影響は外国文学研究にも及ぶことが予想される。外国文学を学ぶ学生の減少が外国文学研究者の減少や読者の減少につながることは容易に想像できるし、研究環境の悪化も憂慮されるところである。本稿では、このような状況をも念頭に置きつつ、2014年4月～2015年3月のアメリカ詩の研究について概観するが、若手の研究者が着実に研究成果を発表している様が窺え、心強い。

まずは単行本から見ていくことにする。松本明美『白の修辞学——エミリー・ディキンソンの詩学』（関西学院大学出版会、2014年8月）は、「第1部 ディキンソンの白の修辞学」「第2部 ディキンソンの美意識」「第3部 空白の記憶」の3部からなるディキンソン論である。第1部は、「白」に言及のある詩と「画家と詩人のモチーフ」を用いた詩、自然風景や昆虫をモチーフとしつつ、詩人の芸術観および詩論を含む詩の代表とされる「蜘蛛」の詩、「雪」の詩を含む「冬の詩」を論じる。第2部は、「美」についての詩、ディキンソンの「美」の定義、ディキンソンの「夏」の詩を取り上げ、第3部は、「喪失」をモチーフとする詩、ディキンソンの詩における視覚と聴覚、ディキンソンの詩における記憶と忘却を論じる。「結論」で著者は、ディキンソンの「白の修辞学」を「白」から「無色」に至る一種のスペクトルとして図示し、雪、花嫁のドレス、蜘蛛の糸を「白」の位置に、喪失、忘却、無を「無色」の位置に、清廉潔癖や白熱する炎を両者の中間に置いている。

フウの会編『モダニスト ミナ・ロイの月世界案内——詩と芸術』（水声社、2014年8月）は、ロイの詩23篇と散文6篇の翻訳を収録するとともに、「月世界の案内人、ミナ・ロイの生涯」（吉川佳代）、「ミナ・ロイ——世紀の詩人」（ロジャー・L・コノヴァー）、「「ジョアンズへのラヴソング」——逸脱する恋愛ポリティックス」（吉川佳代）、「ミナ・ロイと与謝野晶子とフェミニストたち」（ヤリタミサコ）、「隠れた美を照らし出す」（松沢英子）、「モダンの光跡——表現の探求者に捧げる」（高田宣子）、「ミナ・ロイ——月とランプシェイドの詩人」（高島誠）の解説・論考を収録する。巻末には年譜と文献リスト、吉川・高田両氏による「解説」があり、また、随所に図版が掲載されている。アメリカやヨーロッパと比較して、日本ではロイの紹介・研究が活発であったとは言い難い。彼女の生涯と作品の本格的な紹介となる本書は画期的なものであり、出版を慶びたい。これを契機として、ロイの詩や芸術作品についての研究がさらに進められることを期待したい。

## アメリカ詩の研究

パウンドについては、野上秀雄『歴史の中のエズラ・パウンド』（文沢社、2014年10月）と今村楯夫・真鍋晶子『ヘミングウェイとパウンドのヴェネツィア』（彩流社、2015年1月）が出版された。前者は、それまでウェブ上で公開されていた文章を書籍の形にまとめたもので、「第一部 世紀末」「第二部 モダン・エイジ」「第三部 戦後」の3部構成でパウンドの生涯と彼が生きた時代を追っている。また、評伝部に続き、パウンドに関連する8編のエッセイを収録している。日本語で読めるパウンドの評伝としては、マイケル・レック『エズラ・パウンド 二十世紀のオデュッセウス』（高田美一訳）があるが、筆者が知る限り、本書は日本で書かれたパウンドに関する最初の評伝である。後者は、二人の著者が、ヘミングウェイとパウンドゆかりのヴェニスおよび周辺の地を訪れた際の記録や印象を綴る本で、前半がヘミングウェイ（今村）、後半がパウンド（真鍋）を扱う。旅行記の要素もあるが、前半部においては、第一次大戦時のヘミングウェイの足跡や、ヴェニスを舞台とする小説『河を渡って木立の中へ』の背景、後半部においては、パウンドおよび関係者（オルガ・ラッジ、メアリ・ラケヴェルトら）に関する伝記的事実や、パウンドの詩においてヴェニスの種々の場所への言及がなされる箇所をめぐる考察が浮かび上がるようになっている。なお、これら2冊に加え、『抵抗することば——暴力と文学的想像力』（藤平育子監修、高尾直知・舌津智之編、南雲堂、2014年7月）に収録された、渡辺信二「うたはアメリカの大義から——パウンドの詩学」（第5章）にも触れておく。パウンドの詩学をアメリカ詩の伝統に照らし合わせて考察する試みで、パウンドが彼の理想とする「アメリカの大義」に殉じたと結論づけている。

田口哲也『ケネス・レクスロス中心の現代対抗文化』（国文社、2015年3月）は、レクスロスの生き方と作品をめぐる議論を中心に、20世紀後半から現在にいたる詩人、写真家、ミュージシャンらの創作や活動について論じる本である。序章および10章からなる。各章の内容を簡単に紹介すると、第一章は、十国修や寺田建比古らの文章を引きながら、『荒地』におけるエリオットの意義やロレンスの生命賛歌の重要性を示し、第二章は、報道メディアに端的に示される批評の衰退と思考停止状態を告発し、また、日本のシュルレアリストの写真家である山本悍右に対するアカデミズムの反応（の欠如）を批判する。第三章は、表現媒体を越境する表現者の例として、「ことばで詩を書いた」北園克衛、「音楽で詩を書く」ボブ・ディランとレナード・コーエンを取り上げ、また、京都の「ほんやら洞」で朗読したレクスロスの例を取り上げて、印刷媒体や現代のネット環境を必要としない、聴衆に直接語りかける朗読をメディアに対する革命として捉える。第四章は、シカゴからサンフランシスコに移動したレクスロスの思想的、文学的変遷について論じるとともに、「海続き」であるカリフォルニアと日本の親近性を指摘し、さらに、日本の文学事典等に見られる「ビート理解の浅さ」を批判する。第五章は、レクスロスの日本文学や文化とのかかわりを、京都での生活

## 回顧と展望

に題材を得た詩「花環の丘」の読解などを通じて論じる。第六章は、2001年9月11日の事件の後に編まれた詩のアンソロジー『目には目を、は世界を盲目にする』(*An Eye for an Eye Makes the Whole World Blind: Poets on 9/11, 2002*)を紹介し、そこに収録されたマイケル・マクルーアとポミー・ヴェガ、収録されなかったウリ・ハーツとジョン・ソルトの詩に、アメリカ西海岸の対抗文化の可能性の存続を見ようとする。第七章は、70年代のパンクを取り上げ、その商業主義と「管理された楽音」の否定の姿勢を論じ、第八章はレゲエを取り上げて、グローバリゼーションの言説に対抗しようという言説や表現活動に光をあてる。第九章は、著者が訪れたバンコクとアムステルダムに見るポストコロニアル状況を報告し、第十章は北園克衛の作品を取り上げて、新しい文化がどのように形成されるかについて考察する。著者はこうした多岐に及ぶトピックをめぐる議論を通じて、資本主義による搾取の批判、抽象化された世界への反抗、西洋中心主義から脱却して自然や人間と直接触れあう生活の重要性を説き、まさにそれらを実践しようとした詩人や芸術家の中心としてレクスロスを位置づけている。

久我俊二『スティーヴン・クレインの「全」作品解説』（慧文社、2015年3月）は、クレインの作品をすべて取り上げて解説する労作である。その「9. 詩作」には、『黒い騎手たちその他の詩』『戦争は優しい』および未編集の詩についての解説がなされている。それぞれの詩に付された解説は短いが、実際にクレインの詩作品を手にとって読もうとする者にとって有益である。

翻訳書に移る。『シャールウッド・アンダーソン全詩集——中西部アメリカの聖歌/新しい聖約』（白岩英樹訳、作品社、2014年6月）は、アンダーソンが生前に出版した2冊の詩集(*Mid-American Chants*と*A New Testament*)の翻訳を1冊にまとめたもの。訳者は前者を以前に『中西部アメリカの歌』として出版しているが、今回、タイトルを変え、細部に大幅な改訳を施しているという（「訳者あとがき」）。アンダーソンの詩作品が読まれることはそれほど多くないように思うが、本訳書の出版を契機に、多くの研究が進むことを期待したい。

ゲーリー・スナイダー『奥の国』（原成吉訳、思潮社、2015年3月）は、思潮社の「ゲーリー・スナイダー・コレクション」の4冊目である。本訳書は、全5セクションからなる原著のうち、「宮沢賢治」と題されたセクションを除く4セクションを訳したもの。スナイダーによる賢治の詩の英訳を再び日本語に訳す代わりに、本書は「訳者あとがき」にスナイダーが英訳した賢治の詩の作品名および彼が用いた賢治の詩集を記している。同じく「訳者あとがき」には、『奥の国』所収の作品が執筆された時期のスナイダーの略年譜があり、訳詩に付された注は原詩を読む者にとっても有益である。

論文に移る。*The Journal of the American Literature Society of Japan*, No. 13 (日本アメリカ文学会、2014年3月)には、Meghan Kuckelman, “Metonymy, Revolution,

and the Eidetic Reduction in Lyn Hejinian's *My Life*」が収録されている。「言語詩人」(L=A=N=G=U=A=G=E poet)ヘジニアンの自伝的散文詩『マイ・ライフ』を取り上げるこの論文は、テキスト中の文と文の換喩的關係が自伝的約束事を突き崩す様に注目することで、この作品が、実は読者に他者の自伝を生み出す行為に参入する機会を提出するものであることを示そうとするものである。ヘジニアンのテキストの精緻な読解を試みた本論文は、日本アメリカ文学会第5回新人賞(The ASLJ Young Scholar Award for 2014)を受賞した。Studies in English Literature, English Number 56(日本英文学会, 2015年3月)所収の、Yoshida Aya, “Saxifrage is my flower that splits the rocks’: William Carlos Williams’ American Idiom and ‘Variable Foot’ Reconsidered”は、ウィリアムズが英詩の影響を脱して到達した variable foot の試みを、イギリスからアメリカに渡ったオーデンとの対比や、オーデンのウィリアムズへの反応に着目しつつ論じている。

そのほかに次の論考を挙げる。紙面の都合で著者名、タイトル、掲載誌名を挙げるに留めるが、読み応えのある論考が多い。木全滋「ホイットマンの「復活」と二月革命」(『MULBERRY』[愛知県立大学外国語学部英米学科] 64号, 2015年1月), Dorsey Kleitz, “‘With Labyrinths Replete’: Pilgrimage and Memory in Melville’s *Clarel*” (『英米文学評論』[東京女子大学英米文学研究会] 第61巻, 2015年3月), Junko Kanazawa, “Emily Dickinson’s Prewar Martial Poems” (『人文・自然研究』[一橋大学大学教育研究開発センター] 第9号, 2015年3月), 松本明美「詩とソネット——エミリー・ディキンソンの不滅の芸術」(『関西学院大学英米文学』No. 83, 2015年3月), 上野葉子「Ezra Pound と Marianne Moore の logopoeia」(『Ezra Pound Review』17号), 遠藤朋之「「時間の空間化」のグランド・デザイン——「詩篇 第1篇」を細かに読む」(同), David Ewick, “The Instigations of Ezra Pound by Ernest Fenollosa, II, Larceny: Pound, The Telluric Mass of Miss Lowell, and the Pilfering of ‘The Chinese Written Character as a Medium for Poetry’, 1914–1921” (『英米文学評論』[東京女子大学英米文学研究会] 第61巻, 2015年3月), 小澤悦夫「雪と「死の願望」——“Stopping by Woods on a Snowy Evening”考」(『文化論集』[早稲田商學同攻會], 2014年9月), 松田正貴「翻訳としての詩——ウォレス・ステューヴンズ「吹きすさぶ風へ」について」(『關大英文學』2015年3月), 森田孟「可能なことを目指して——詩人の在り方を問うウォレス・ステューヴンズの『アデিজア』」(『成城文藝』第228号, 2014年9月), 森田孟「詩とは何か——W・S・マーウィンとバーナード・ウェストの作品」(『成城文藝』第227号, 2014年6月), Toshiaki Komura, “Poetics of Self-Loss in Contemporary Japanese American Poetry: A Case of Janice Mirikitani’s ‘Recipe’” (『文学部紀要』[藤女子大学] 第52号, 2015年2月)。

(名古屋大学教授)